ホームタウンとしての磐田市が一斉観戦事業によって与えた効果の検証

Verification of the effect which Iwata-shi as the hometown had by the spectating event all at once

1K09B151　長屋 直人
指導教員　主査 木村 和彦 先生　副査 間野 義之 先生

【緒言】

1993 年にスタートしたＪリーグは「地域に根差したスポーツクラブ」を核としたスポーツ文化の振興活動に取り組んできた。2012 年にはＪリーグ開幕 20 周年を迎え、今後更なる発展が期待される。このＪリーグの成長を支えてきた要因の１つが「ホームタウン」の存在だろう。静岡県磐田市をホームタウンとするジュビロ磐田は、近年積極的にホームタウン活動を行っており、ホームタウンとの密接な関係を構築している。2011 年度からは磐田市が「Ｊリーグクラブと地域社会が一体となって実現する、スポーツが生活にとけ込み、人々が心身の健康と生活の楽しみを享受することができるまち」を目指し、様々な取り組みを実施した。その１つが行政である磐田市が主体となり、クラブ・教育機関と一体となって行われた、Ｊリーグ初の試みとなる「磐田市小学校５・６年生一斉観戦事業」である。

【目的】

磐田市市民部市民活動推進課スポーツ振興室が示した『平成 24 年度ジュビロ磐田ホームゲーム小学生一斉観戦事業の報告書』では、事業を通してジュビロ磐田や磐田市への愛着が向上したことや再観戦意図が見られたことが報告されている。しかし、これらは質問紙の単純な集計や分析にとどまっており、「ホームタウンに住む子どもたちが、ジュビロ磐田の試合を観戦することにより、チームへの愛着はもとより、磐田市をふるさととして誇りに思う気持ちを共有し、将来にわたって磐田市を愛する気持ちを持続させること」という本事業の目的を達成するためには、より詳細な効果を明らかにする必要がある。そこで本研究では、質的効果および観戦経験による愛着の変化の違いに着目し、研究 1、研究 2 を通して「磐田市小学校 5・6 年生一斉観戦事業」における詳細な効果を明らかにすることを目的とする。

【方法】

2012 年 5 月 12 日の J1 リーグ戦第 11 節、ヤマハスタジアムにて行われたジュビロ磐田対鹿島アントラーズ戦を一斉観戦した小学校５・６年生（全 23 校）を対象に、磐田市が質問紙調査を行った。これを基に、質問紙を複写し、再度集計を行った上で分析を実施した。研究１においては川喜田による KJ 法を用いて、自由記述形式の感想である「市内小学校５・６年生全員で、ジュビロ磐田の試合を観戦し応援したことの感想を書いてください」という項目の回答から小学校５・６年生における満足と不満足の内容の抽出を試みた。

研究２においては、小学校５年生における観戦経験の有無と①ジュビロ磐田への愛着の変化の値、②磐田市への愛着の変化の値、③一斉観戦における満足の値、④再観戦意図の値との関連性について統計的分析を試みた。統計的分析には SPSS18.0 を用いた。分析手法は独立したサンプルの t 検定により、平均値の差の検定を行った。

【結果】

研究 1 では「勝利」、「応援する気持ちの伝達」、「応援」、「再観戦意図」、「単純な満足」、「同伴者の存在」、「ジュビロ磐田への期待」、「スタジアムの一体感」、「試合内容」、「選手やプレー」などといった 30 の要因（5431 枚）が子どもたちの満足の内容として抽出された。また子どもたちの不満足の内容として「応援」、「天候」、「観戦場所」、「理解不足」、「単純な不満足」、「イベント」などといった 16 の要因（473 枚）が抽出された。

研究２では①ジュビロ磐田への愛着の変化の値、②磐田市への愛着の変化の値、③一斉観戦における満足の値、④再観戦意図の値の４項目全てにおいて、ジュビロ磐田の試合をスタジアムで観戦したことが「ない」子どもたちよりも「ある」と回答した子どもたちの方が平均値の値が高かった。また各々の平均値の差の検定を行った結果、これら４項目全ての平均値において、1%水準で統計的有意差が確認された。

【考察】

研究１において「勝利」や「試合内容」、「選手やプレー」に関する満足が多く抽出されたことから、この事業におけるジュビロ磐田が果たす役割は大きいと考えられる。しかし、「10 年ぶりにホームで鹿島アントラーズに勝利して良かった」などといったカードが多く見られたため、磐田市や学校が情報の接触度を増やすことでより効果を高められると考えられる。一方で「磐田市への誇り」を示す言葉はあまり抽出されなかったため、事業の目的を達成するためには、この点に着目したイベントや施策が更に求められる。

研究 2 においては観戦経験のある子どもの方が愛着の変化の値や再観戦意図の値が高いことが明らかになったが、これは研究 1 にも見られたように観戦経験のある子どもの方がジュビロ磐田やサッカーへの情報の接触度や理解度が高いからだと考えられる。しかし、この事業においては５年生よりも６年生の平均値の方が低いことが報告されており、原因の追究が今後の課題である。